

墨塗りの下 自責の念

木製看板に「米英打倒」

軍需工場は いま

戦後
69年

④

同時に、木のオモチャをつくるため、木工所を同市大領中町に建てた。これが、丸谷さんの父の八郎さんが戦後に譲り受けた木工所の前身だ。

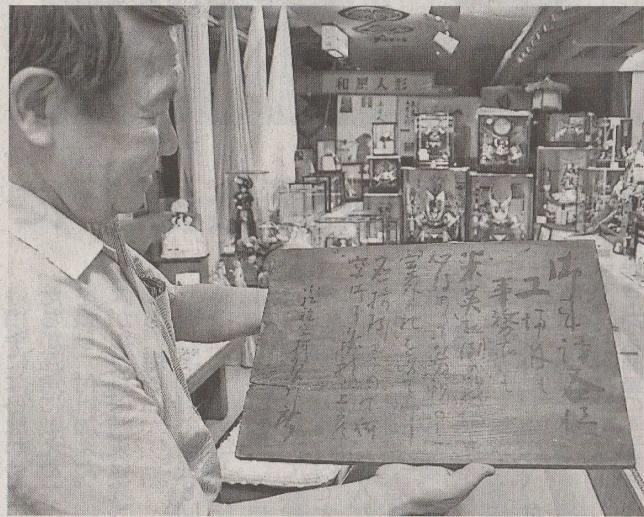
日本軍が太平洋の島々で敗退を重ねた45年、軍用機メーカーが拠点工場を次々と移転させた。清八さんの木工所も、大手の中島飛行機と富士飛行機の部品工場として転用された。

北川さんは当時5歳だった。まだ、清八さんの養子になる前だ。「北清の子が来た、ってフリーパスだった。旋盤とかが置いてあった。工場の敷地で遊んでいたから「けがすんな」と、

怒鳴られた」と振り返る。戦後、清八さんは工場について多くを語らなかつたが、一度だけこんな話をしてくれた。

工場に腕の立つ技術者がいた。飛行機の先端翼をつくるのに欠かせない職人だった。ところが、この男性に召集令状が届き、太平洋の島に向かった。だが、清八さんが軍の上層部に直訴した後、男性はすぐに戻ってきて、戦後も木工所で働いた。

「一緒に行った兵隊はほとんど死んだらしい。だから、父に恩を感じていたようです」と北川さんは想像する。



木製の看板をもつ北川昇三さん＝小松市八日市町

写真に残る墨の跡。誰が塗ったのかは、分からない。ただ、北川さんは言う。「戦後、ものすごい自責の念があったんだろう。自分の飛行機で、大勢の若い人が命を落とした」

平和産業として始めた玩具店だった。清八さんは60歳で他界。北川さんは会社を継ぎ、ひな人形を主力商品として経営に力を注いだ。

北川さんの手元には戦時中のもので思われる木製の看板が残されている。そこには、「工場内も米英打倒」などと記されている。

2008年11月、丸谷さんの母親の葬儀が開かれた。親族代表のあいさつで、航空機製作所について触れた。そして、「戦後は木製玩具から木工会社になり、父と母は汗をかきながら私たちを育ててくれました」とつけ加えた。

小松は紡績業が盛んだったため、織物工場が発展した。海軍小松飛行場があった理由などから、軍需転用された工場も多かったとされる。しかし、記録はほとんどない。日本軍が大本營で記録を処分したように、地方でも同じことがされたという。

丸谷さんは「戦後70年を迎えるこの時こそ、80、90代の人たちに口を開いてほしい」と訴える。「当時、工場で働いたのは地域の人たちだが、戦後はモノを言わなかつた。今こそ、話す時が来たと思う」

(小川泰)

「やはり、軍需工場は存在したのだろうか」。小松市にある実家の木工所が戦時に軍需工場だったことを示唆する古い封筒をみつけた丸谷憲二さん(67)は、いとこの北川昇三さん(74)から、ある集合写真を見せられた。

集合写真の一部は墨で塗りつぶされていたが、水で消すと建物の看板が現れ、「有限会社小松航空機製作所第二工場」「第一軍需工場第三製造協力工場」などとあった。古い封筒に記されていたのも「小松航空機製作所」。丸谷さんは、はつきりと確信した。

北川さんの義父の清八さんは1927年に玩具店を開いた。屋号は「北清」とした。5年後に起きた火事で店が焼け、現在の小松市八日市町に店を移した。当時は、子供向けにメンコやビー玉、紙人形などを売っていた。

